

## ■喜びについての訓練 (2/2)

学問についても、同じことが言える。そのころ、教育を受ける者は、非常にわずかしかなかったが、彼はその地位のゆえに、教育を受ける機会には恵まれていた。「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ」た（使徒 7:22）。「生兵法は大けがのもと」と言われるように、多くの人々は、わずかな業績にもたいへん得意になり、いばりちらすという愚を重ねる。そういう人々は、自分を実力以上に高く評価する。平易なことばを用いず、学識のあるところを見せようとして、覚えてのむずかしいことばを使う。その態度は、自分より無学な人々に対する優越感を意識した謙遜という形で特徴づけられている。その点、使徒パウロと対照的である。パウロは博学であったが、謙遜であり、柔和であった。モーセのように、神の深い奥義を知る者であったが、「すぐれたことば」を用いず、「説得力のある知恵のことば」にもよらなかった（1コリント 2:1-4）。このように、モーセは、その学問のゆえに高慢になることはなかったのである。

モーセはまた、その業績のゆえに高ぶることもなかった。モーセは「ことばにもわざにも力があ」った（使徒 7:22）。伝えられるところによると、彼は、エジプト軍隊の総司令官であったという。あの扱いにくいイスラエルの大群衆を、荒野で導くことができたのは、彼が軍隊で、組織力と規律力を身につけていたからだというのである。いずれにしても、業績というものは、それが大きなものであれ、小さなものであれ、ある人々を高ぶらせる。ネブカデネザル王は、「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか」と言ったが、その高ぶりのために、ついに発狂した。そして、「今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である……」と言いうるまでには、七年の歳月を要したのである（ダニエル 4:30, 37）。大きな業績を見て自ら満足し、あたかもそれが労役者たちの汗なしになされたものであるかのような錯覚を起こし、ついに正気を失う人がある。彼らは気短になり、何ごとにおいても忍耐力がなくなってしまう。ところが、モーセはそうではなかった。彼は、何に満足し、何を喜び、誇るかについて訓練を受けていたので、「地上のだれにもまさって非常に謙遜であった」（民数 12:3）。

容姿や学問、階層や職業、その他さまざまのものが、私たちの「暮らし向きの自

慢」になる危険性を持っている。こうした中であって、私たちはただ、徹底的な訓練を受けることによって、神のため、また隣人のために、大いに役立つ人間となることができる。モーセの例が、このことをよく教えている。彼は自分の地位や名声に満足して誇る代わりに、他人の苦しみのために心を砕いた。「モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こし」た（使徒 7:23）。他人を幸福にしようと心を砕くとき、私たちは、自分の生来の才能や特技などを誇らなくなる。私たちは他人に手を貸そうとして、自分を忘れる。そして他の人々は、私たちの人柄や地位ではなく、私たちの心に住まわれるキリストを認めるのである。

こうして私たちは、他人のために苦しみを受けることを、自分のほんとうの喜びとするようになる（ヘブル 11:25）。人間的には人気がなくとも、神に喜ばれる仕事に没頭する。神の民とともに立つために、自分の権利を捨てるようになる。モーセが「パロの娘の子」という肩書きを捨てたように、この世における肩書きを、取るに足らぬものと見なし、ただひたすら「神の子」として知られるように努力する。神の子たちに与えられている務めは、「はかない罪の楽しみ」よりもはるかにたいせつなものであり、キリストのゆえに受けるそしりや、キリストの御名のゆえに受ける迫害は、地上のどんなに尊い財宝にもまさる富である、と考えるようになる（ヘブル 11:25, 26、1 ペテロ 4:14）。自分の知識や能力に頼らず、「目に見えない方を見るようにして、忍び通」すようになる（ヘブル 11:27）。

主イエスに仕える者は、仕えることに満足を見出し、御名のために苦しむ者は、苦しみのうちに慰めを受ける。神の懲らしめを受ける者は、そのうちに祝福があることを知る。信仰の旅人となる者は楽しみを味わい、主のご命令に従う者は喜びを経験する。すべてのものにごく自然に喜びを覚えるようになるためには、顔もかたちも、教養も、人格も、地位も、業績も、他の人々から受ける賞賛も、そのすべてを、この喜びについての訓練に服させなければならない。すべての賜物が与え主であられる神から与えられたものであることを認め、どんな才能を持っていても神に頼り、どのような榮譽を受けても神の前にへりくだり、すべての栄光を神に帰さなければならない。そして、いにしへのモーセのように、心を低くして、顔覆いをつけ、導きのままに歩み、日ごとのマナを感謝し、見えない方を見ているようにして忍び通し、友人がみな私たちを捨てるようなことがあっても、神を信じようではないか。そのときにこそ、このみことばが成就されるのである。

「主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる」（詩篇 37:4）。